

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

誰がご存知？ 中小企業の実態

先般ある旅館で、実際にあった話である。

旅館業という業種柄、ご多分にもれずかなりの借金があり、約定通りの返済ができないでいたが、まったく返済をしないことはなく、そのような意味では滞りはない。そんな時、老女将の自宅に地方支店の次長クラスがやってきた。いつもの通り、早急の返済を迫るだろう覚悟はしていたが、今日は違っていた。自宅に上がり込み、筆笥を開けるなり、女将の営業用の着物を見るや、「随分贅沢ですね。借りた金返さんで、そんな身分じゃないでしょう、これらを売れば、いくらになる。悪いという気があるなら、すぐに売って返済の足しにする...」。サラ金やマチ金の取立て屋ではない。正真正銘の地方銀行、地域ではエリート企業といわれている支店の次長さんである。どれだけ偉くて、どれほどの権威があるのか定かでないが、取立て屋と一体どこが違うのか？

繊維関係の零細町工場の経営者の話である。

この業界も競争が激しく、画期的活路が見出せず数年が経過してしまった。昨年永年連れ添った奥様に先立たれ、精神的にもかなり気落ちして、従前のパワーも感じられなくなってしまった年老いた社長さん。自分の年金すら返済にまわし、やっと生きている...。当然ながら、そんなセンチメンタルな事由は関係ない。銀行は約定に従って回収しなければ、銀行としての面子も立たないし、担当者の首も飛ぶし、いやいや、そもそも銀行としてのビジネスにならない。この社長にある銀行から、朝、昼、晩と毎日電話があるそうである。必ず決まって毎日、「仮に自殺しても、保険解約しちゃたからなあ...」。別に銀行に対して他意はない。しかし、話したくも聞きたくもない話である。

借りたものはきちんと返す、至極当たり前の話である。回収するのは当然のことであり、返さないのがいけないこと、誰がなんと言っても正論である。

中小企業という実態は、あるいは、偉い先生方が言う通り、資金も人材もない、努力もしない駄目な存在かもしれない。トヨタが過去最高の好調ぶりと聞くが、トヨタの車はその中身、多くの部分中小企業に委ねられている筈。トヨタに限らず、日本経済は二重構造、中小企業の役割は非常に大きい。景気が良くなってきたと豪語する政治家、大学教授、評論家、エコノミスト達、数ヶ月前の、しかもマクロデータばかり机上で分析していないで、中小企業の、泥臭い実態を、自分の目と耳と体で見してほしい。

巨額な税金を投入して、メガバンクを救済するも一考だが、その資金を政府系金融機関に活用させ、中小企業支援策に投じたとしたら、どのくらいの中小企業が救われたか、稚拙な話かもしれないが、誰か、本気で中小企業を救ってほしいものである。